



あけぼの

第43号 2017. 3. 1
宇和特別支援学校
(知的障がい部門)
図書館発行

まだ、幼稚園に通っていたころ、寝る前にはよく、母が絵本を読み聞かせてくれました。あるとき、母が何かの用事で読み聞かせができないことがありました。そのことに腹を立てた私は、周りにあった何冊もの絵本にフェ

ルとが大好きです。読書は私にすばらしい宝物を届けてくれます。物語を通して平安時代から明治・大正・昭和の時代を経験することが出来ます。また、アジアやヨーロッパ・アメリカなど様々な国を知ることが出来ます。昔の人の生き方やものの見方、考え方に触れることもできます。「もし、魔法が使えたら…」と考えながら読んだ本もあれば「本当にこんなことが起きるの…」とドキドキしながら読んだ作品もあります。



校長 丹下 徳子

「読書の思い出」

ルトペンで乱暴に自分の名前を書き込みました。そのことで母から叱られた記憶はありませんが、翌朝、自分がしたことを目の当たりにして、ぼつと悪い気持ちになったことは覚えています。乱暴に書いた自分の名前はお気に入りの絵本を手取るたびに目に入り、自分の振る舞いを後悔することになりました。

今もそうですが私の自宅近くには書店がありません。ある日父が、近くの町にある小さな書店に私を連れて行ってくれたのです。棚に並んでいるたくさんの本の中から私が選んだのは「どうぶつずかん」でした。今から五十年近く前のことですから、その図鑑に掲載されていたのは動物の写真ではなく、動物の絵です。私はその図鑑で繰り返し見ていたのは珍しい動物よりも、身近にいた犬のページでした。犬の種類が多いこと、それぞれの犬種に名前があることを知ったのはその図鑑を通してでした。今でも覚えているのは「ボルゾイ」という鼻が細長く上品な顔つきをして、長い毛に覆われた大型犬です。最近読んだ小説の中にボルゾイ犬が登場したとき私の頭の中には、あの図鑑に描かれていた絵が浮かびました。

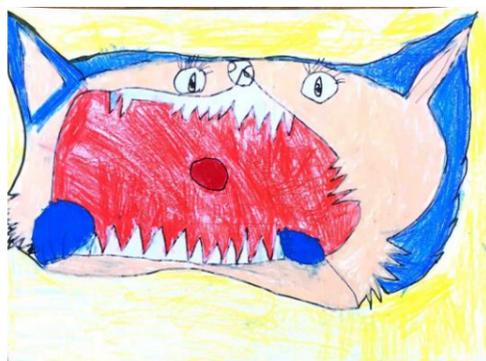


「あかいかさがおちていた」
童心社より

この図鑑だけでなく私のお気に入りのお本はいくつかありました。そのうちの1冊が『あかいかさがおちていた』という絵本です。手元からなくなってしまうぶん経ち、もう一度読みたいと思っていました。最近になって復刊されていることが分かり、久しぶりの再会を果たしました。表紙には一本の赤いかさとそれをぐるぐる何重にも取り囲む緑色の線が描かれています。ジャングルに落ちていた一本の赤いかさが、初めは「さる」に拾われ、次は「へび」に、その次には「ライオン」病院のカンガルーの看護師さんを使って、最後には…というお話です。読み進むうちに、幼い日に読み聞かせてくれた両親の語り口が思い出され、とても幸せな気持ちに満たされました。本はいつでもあなたのそばで、あなたを待っています。



「おおきな木」
篠崎書林より



読書感想画 作品展



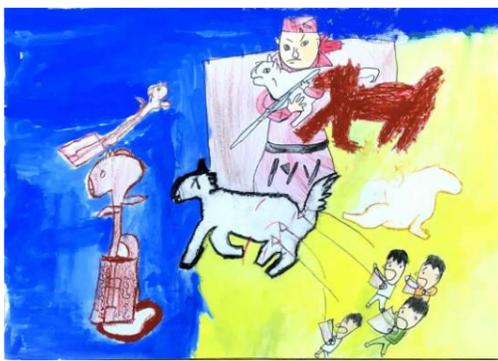
「おおきな木」
高二年(訪問) 柴田 美咲妃

「かぐやひめ」
小一年星組 三瀬 翔大

「ともだちや」
中一年A組 亀井 玲夜

「三びきのかわいいオオカミ」
中一年B組 西田 秀美

「さつまのおいも」
中一年C組 徳田 遙希



「かぐやひめ」
小一年星組 河野 凌大

「ともだちや」
中一年A組 野間 徳乃実

「スーホの白い馬」
中一年B組 赤松 大雅

「にじいろのさかな」
中一年C組 下石 涼太

